慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新野幸次郎著 現代市場構造の理論
Sub Title	Kojiro Niino, The theory of modern market structure
Author	原, 豊
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.8 (1968. 8) ,p.925(91)- 928(94)
JaLC DOI	10.14991/001.19680801-0091
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680801-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に土地の商品化、貴族の諸領地につきまとう限嗣相続その他の売却または分散の禁止の打破、第二に、教会領所有地と広大な町村共同体の集団所有地――したがって利用率のわるい土地――つまり共有耕地や、共有牧草地や、共有林地などが、個人企業の手にはいりやすくされなければならなかったこと、第三に、ブルジョアになりそこねた人たちからなる「自由な」労働力の創出という目的の達成」を目的としておこなわれたものであることはいうまでもない（二四〇頁）。けれども問題はまさしくつぎの点にあるのではなかろうか。つまり、二重革命は、以上の三つを中心として展開されるのであるが、しかしそれにもかかわらず、イギリスにおいては資本主義的大農制度を確立し、フランスにおいては圧倒的な小農民経営を固定化し、そしてドイツにおいてはユンカー的大農経営という特殊ドイツ的経営形態を必然化した要因は何であったか、これこそが実に、それらの国々における資本＝賃労働関係を規定し、それぞれの階級闘争の性格にも大きな影響を与えたところのものであり、この基柢的要因は、一七八九年から一八四八年の二重革命の時期に見出されなければならない。しかし、読者は、本書からそれにかんする理論的説明をうることはできないであろう。

最後に、この二重革命における上部構造の問題であるが、これはまことに著者の趣味豊かな人柄を偲ばしめる諸章であるが、筆者には、これについて批判や感想をのべる資格はない。ただひとつ、宗教と経済の問題に関連して、著者は、プロテスタントについてふれているが、わたくしは、やはり、この問題については、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（Die protestantische Ethik und der》Geist《des Kapitalismus）を想いうかべる。周知のように、ウェーバーは、「資本主義」の精神という場合 Geist des Kapitalismus と Kapitalistischer Geist の二様に使っているが、前者と後者とは、明らかに区別している。思うに、この二重革命の時代は、前者よりは後者の意味、すなわち資本家的精神こそが問題となっていたのであろうが、著者から、この問題についてきくことができなかったことは残念であった。

あまりにも博学で、問題があまりにも多方面にわたりすぎているために、本書の概要をつかむのが精一杯で、積極的な批判といえない、たんなる感想を書き記すにとどまったが、本書は多くの写真をはさんですぐれた啓蒙書であるとともに、この問題の研究者にとっても充分読むに値する文献であるといえよう。厖大な原書で読むのに難渋した経験を筆者ももっているが、安川悦子、水田洋両氏の訳業によって、今回、楽しく読むことができたことは感謝に耐えない。なお、最後の「訳者あとがき」は、著者ホッブスボームの人となりを知るのに大変便利である。多くの学生諸君にお奨めする。

（岩波書店・一九五八年二月刊・A5・五一七頁十一九頁・一、六〇〇円）。

書評

新野幸次郎著『現代市場構造の理論』

原　豊

伝統的な価格理論や企業行動理論のもつ静態的性格や限定された市場構造ならびに行動仮説のもつ限界が反省されて以来、今日までかなりの年月が経過した。そして、この間に、伝統的な理論が捨象してきたさまざまな競争条件や、企業行動と市場構造との多様な相互制約関係と市場成果に関する数々の理論的・実証的研究があらわれている。だが、「何ら包括的な原理をもたず、ただ特定企業の特殊条件をあらわす個別的ケースの蒐集にすぎない」（ハイマン）と批判される側面や、伝統的な理論の静態的な性格が払拭されていないという難点が、この新しい理論的発展の方向に付随し、その成果は必ずしも満足すべきものとはいえなかった。

本書は、このような伝統的な理論およびその後の理論的発展の成果を基礎としつつ、市場構造に焦点を合わせ、その動態化すなわち、現代市場構造の形成と変化の論理を解明しようとしたものである。本書のはしがきにも強調されているように、市場構造のいかんによって、市場成果、さらには国民経済的成果たとえば経済成長には顕著な相違がもたらされる。したがって市場構造の変化をどのように把握するかは、資本主義経済発展の論理を展開するうえにきわめて重要な意味をもっている。

ところが、今日まで、このような市場構造そのものの形成や変化が直接の分析対象となることは、産業組織論の一部を除いてはほとんど少なかったといってよいし、分析対象となっても経済学的解明が十分になされているとはいえない現状にある。本書執筆の動機は、市場構造理論のこの現状を少しでも前進させる契機となることにあると述べられているが、豊富な学識を駆使して市場構造理論のパースペクティヴな把握を可能とし、数多くの問題点を提起している本書は、十分にその役割を果すものといってよい。このような本書をかぎられた紙数で紹介することは困難だが、以下その要点だけをとりあげよう。

まず、第一章は、現代市場構造の変化に関するバーリー、ミーンズの問題提起、アメリカにおける経済力集中の実証的分析と、それにつづくTNECによる産業集中の調査をとりあげて、現代市場構造理論の発展の契機となった現実的背景を明らかにする。「その原因が何であれ、現代において競争制限的な市場構造がかなり一般化し、かつての経済学が出発点とした完全競争や純粋競争といった市場構造とは全く異質的のものとなってきたことだけは、もはや否定できない事実であることを認めておかなければならない」。

このような市場構造の変化を古典的な経済学からはどのように説明しているか、その貢献と問題点は何かを扱かうのが、第二章「市場構造の変化への古典的接近」である。とりあげられているのは、マルクス、ヒルファディング、スウィジーのマルクス派と、マーシ

ャル、ロビンソン、チェンバリンおよびツイマーマンの近代経済学派である。そして、近代経済学派は市場構造変化の論理についての関心がやや稀薄であり、企業均衡および産業均衡の静態的な理論に傾斜していること、これに対してマルクス派は資本主義経済の運動法則の解明という動態的な側面を固有の課題とする故にすぐれているが、技術革新のごとき産業の諸条件や企業の行動原理などの多様性を介しての分析ではないという判断が下される。

最後のツィマーマンは、その「独占化性向」をとりあげ、一定の市場組織および取引者たちの与えられた戦略から出発し、その条件における価格、販売量の決定を問題とする一般の市場構造論の限界を指摘する。したがって短期的、主観的分析であるが異なった市場構造を導出する経済的諸条件を分析するというその問題意識は著者によって高く評価される。

なお、この章の独占化性向は ε_s が小になり ε_d が増大するときには増大する」という個所は（七〇頁）、ε_d が小になり ε_s が増大するときの誤植であろう。

第三章では、産業組織論が検討される。はじめに産業組織論の系譜を一べつした後、ベイン、ケイブス流の産業組織論とくにベインの所説を中心にしつつ、かれらが市場構造決定のメカニズムをどのように把握しているかが吟味される。そして、産業組織論における市場構造の分析も、諸産業の市場構造の特質および類型化の基準の提供、およびその比較静態的分析を行なうにすぎず、市場構造変化の論理を真正面から取扱かうものでなかった。つまり、産業組織論的接近には、発展の論理の追求が不十分であると批判する。

産業組織論的接近には市場行為と市場構造の相互関係的把握がないわけではないが、たしかに指摘されるような不十分さがあり、その点に産業組織論の発展の可能性が残されていることはまさに本書の示唆するとおりである。

かくして、第四章では、寡占的市場構造形成の論理をとりあげる。この章は、本書の三分の一をこえる頁数があてられ、本書の中心をなす部分であり、著者の積年の研究のあとが引用された多数の文献からうかがえる。

まず、産業創設時から少数企業に支配されている市場と、競争の過程を通じて小数企業が支配的地位についた市場の二過程に区分したのち、競争を通じて集中を招く要因として、あらためて規模の経済性、資本調達力、生産物差別化、合併ならびに合同の四要因のそれぞれが集中に及ぼす影響が詳細かつ客観的に検討される。

たとえば、寡占市場構造の形成において基本的な役割を演ずるものとみなされる規模の経済性については、その妥当性を否定するオイケンとブレアーの所説、同様の実証的結果をえたＴＮＥＣの調査と、規模の経済に関して肯定的なシュタインドルの見解やイギリスにおける実証的研究を俎上にのせて検討した上、「いずれにしても、われわれは、一括して、規模の経済性を強調したり、あるいは否定したりすることなく、それが産業によって根本的に異なっていることを前提したうえで、規模の経済性を承認しておきたいと思う。」という。このように、本書の論究は、一方的な主張に偏することなく、つねに対象に客観的な光をあてようとするニュートラルな態度で貫かれている。

上述の四要因のうち、とくにその役割が強調されるのは、資本調達力である。この資本調達力と関連して、銀行の役割と、銀行市場の構造とその成果がとり上げられる。ここは、企業金融にとくに関心をもつものにとって見逃せない部分である。

さらに、生産物差別化に関しては流通機構のもつ重要性に注意を喚起し、合併・合同が類型化されて説明される。

こうして高度に集中化した産業において競争を勝ちぬいてきた大企業間には、規模格差したがって費用格差および資本調達力格差が決定的な意味をもたなくなり、競争はおのずから一定の範囲内に限定されると考えられる。

この章の末尾においては、寡占的市場の存続条件が検討される。その第一は産業需要の長期動向、さらに規模の経済性、生産物差別化、既存企業の絶対的な費用上の有利性である。

以上の寡占的市場構造は、現代資本主義の基本的骨格をなしているが、これと並んで、あるいは下属している中小企業よりなる原子的市場構造の形成と再生産が第五章でとりあげられる。このアプローチには産業組織論的な手法が用いられており、中小企業論としては今までにないユニークなものといえる。過度競争の理論を、寡占的市場型の過度競争論に属するフィッシャー＝ジョーンズ＝型と、原子的市場型に属するレイノルズ＝ベイン型に分けて紹介したところも興味深いが、この過度競争については、この章につづいて過度競争の分析を補足した「過度競争の法律的概念」が補論として付加されている。

第六章は、寡占的市場構造と原子的市場構造の「二つの市場構造の交錯と再生産」と題された結論的な短い章で、寡占的市場を基礎とし、原子的市場構造を補足的市場とする階層的構成に言及する。

評者が責を負うべき遺漏が当然あるとは思うが、本書の内容はほぼ以上のごとくである。

最後に、本書を一読して評者がえた印象と疑点の二、三点に触れておきたい。

まず、第二章におけるマルクス経済学と近代経済学の評価自体には異論がないが、指摘されているように両者の間に明らかに方法論上の相違が存在しているし、第一章の問題提起から第三章の産業組織論に及ぶ論理展開のコンティニュイティからいっても、この章におけるマルクス経済学の登場は、この分野に学識深い著者にとっては少々舌足らずの説明となるおそれがあると同時に、評者にはやや異質的に感じられたことを告白しておきたい。

次に、寡占的市場あるいは寡占体制等の概念が使用されているが、評者の目を通したかぎりでは、ウィルコックスの命題（二二頁）以外には明示的な定義がなく、寡占的市場と集中との間の構造的な関係や寡占的市場と原子的市場の中間的型態をどうみるかがはっきりしない。この点と関連して、二つの市場構造の階層的再生産と並んで、同一市場内で競争の階層化を生み出す混合的な市場構造をとらえる必要がありはしないかとも思われた。

また、著者みずからも巻を閉じるにあたって述べられているように、市場構造の形成そのものに本書の力点がおかれ、市場構造が企業間競争のメカニズムのなかで賃金率、利潤率の変動を通じて実現されてゆく過程の統一的説明にまで及ばなかったことが残された問題であろう。しかし、そのことを意識され、かつ十分な資料を準備されながらも、本書の分析を、問題の焦点を浮彫にするためにコンパクトな形に整理する段階で止められている著者の自制（これは本書の行間や脚注から十分に察知される）をむしろ多として、今後の発展に大いに期待したいと思う。

これらの指摘がかりに正しいものとしても、それによって本書の価値はいささかも損われないし、現代の市場構造理論発展のための礎石として、本書の意義はきわめて大きいものと断言できるのである。

（新評論社・A5・二七六頁・九五〇円）